

## 薛宝釵と【冷香丸】：薬の描写から見た『紅樓夢』 の人物設定

垣見，美樹香  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9638>

---

出版情報：中国文学論集. 28, pp.85-101, 1999-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：



## 薛宝釵と【冷香丸】

——薬の描写から見た『紅樓夢』の人物設定——

垣 見 美樹香

はじめに

よく知られた魯迅の小品に「父の病氣」と題する一篇がある。その梗概は以下の如くである。

魯迅の父が病に倒れ、ある名医に往診してもらうことになる。その名医の処方する薬引というのが、三年霜に当った砂糖黍等、簡単には手に入らない代物ばかりであった。しかし、家族の者は父の為に必死で手に入れようとする。そんな生活が二年近くも続くが、父親の病は快方に向かうどころか、反対にひどくなる一方であった。そんなある日、その名医が自分の腕に限界を感じてか、魯迅の家族に自分の知り合いの陳蓮可という名の名医を紹介する。ところが、この陳先生の処方する薬引というのも、前の医者に劣らず、非現実的なものばかりであった。例えば、もともと一つの穴にいた蟋蟀一対や破れた古太鼓の皮で作った敗鼓皮丸といったものがある。だが、やはり、家族の者はあらゆる努力をして手に入れようとする。

悠久の歴史を持つ漢方医学を擁する中国では、『金瓶梅』や『鏡花縁』等、小説の世界でも薬をストーリーの展開等からませ、格好の小道具として用いることが少なくない。『紅樓夢』も其の例外ではなく、薬の描写は、特に八十回本の至る処に取り込まれている。しかも、『紅樓夢』の場合、其の描写は頗る詳細で、具体的であることから、薬が単なる小道具ではなく、作品世界を理解する上でとりわけ重要な関鍵の一つとして用いられていると推測される。

薛宝釵と【冷香丸】（垣見）

そして、その数多の薬の中でも、その処方、材料からして際立って異彩を放つのが、薛宝釵の専用薬である【冷香丸】という薬である。

この薬の詳細は、第七回に薛宝釵自身によって次の様に語られる。<sup>1)</sup>

「…春に咲く白牡丹の花芯が十二両、夏に咲く白蓮の花芯が十二両、秋に咲く白芙蓉の花芯が十二両、冬に咲く白梅の花芯が十二両と要るのです。この四種類の花芯を、翌年の春分の日に太陽にさらして乾かし、粉薬と一緒に、細かく砕くといひのです。また雨水の日に降った雨が十二銭要りまして…」。「お話しした通りにうましく雨が降ればいいのですが、たとえ雨が降らなかつたとしてもその時は再び待たなくてはならないのです。白露の日の白露を十二銭、霜降の日の白露を十二銭、小雪の日の白雪を十二銭分。この四種の水を平均によく混ぜ合わせ、薬を加え、更に十二銭の蜂蜜、十二銭の白砂糖を加え、これらを龍眼ほどの大きさの丸薬に丸め、年代物の磁器性の壺の中に盛り、花の根元に埋めておきます。発病した時に、一丸取り出して、十二分の黄柏の煎じ薬で飲み下します。…宝釵は言います「意外にもうまくいったのですよ。あの方（お坊様）が教えて下さった後、一、二年で、うまい具合に全て整い、やっと組み合わせる事が出来ましたの。…今は梨の樹の根元に埋めてあるのですよ。」周瑞の妻女はまた問いかけます「このお薬には名前があるのですか？」宝釵は言います「ありますのよ。その名前もあの頼頭のお坊様が教えて下さいまして、「冷香丸」といいます。」

この様に、この世に存在しそうにない非現実的な材料を以て薬を構成するのは、先に触れた魯迅の事からしても、中国では古来珍しいことではないであろう。しかしながら、そういった材料が全てそろう事は皆無に等しいのであるまいか。事実、『紅樓夢』に於いても、賈宝玉が紹介する林黛玉の体質に最も適する非現実的な薬の材料は、そろえる事が不可能だと設定されている。<sup>2)</sup>更に言えば、非現実的な材料から成る薬を服用する者は、作品中、薛宝釵ただ一人である。そして、この様に考えると、薛宝釵と【冷香丸】の設定には、何か作者の特別な意図が隠蔽されていると想定される。

そこで、本稿では、この【冷香丸】が如何なる薬であるか具体的に説明することによって、それが薛宝釵の人物像とどのような関わりがあるかについて考察してみたい。更には、薛宝釵と林黛玉の人物像の設定に於いて、【冷

香丸』が『紅樓夢』の中で如何なる存在価値を持つのか、出来得る限りの言及をしたいと思う。

### 一、薛宝釵の体質と【冷香丸】

【冷香丸】は管見の及ぶ限り、どの医学書にも現実の漢方薬としては記されておらず、作者が独自に案出した架空の薬だと考えられる。そこで、第七回の描写に従って、この薬の構成材料の一一について再確認しつつ、その効能について具体的に検討してみたい。(漢方薬名は上述の第七回に於ける【冷香丸】の説明に対応する。尚、傍点は筆者。又、引用の長いものには訓読を付した。)

【白牡丹】「涼血」「花爲陰」「治血中伏火除煩熱」(血中の伏火を治め煩熱を除く)「能瀉陰胞中之火」(能く陰胞中の火を瀉ぐ)「後人乃專以黃蘗治相火」(後人乃ち専ら黄蘗を以て相火を治む)

『本草綱目』卷十四草部

「除血熱」「瀉腎臟陰中之火及肝熱之由腎而致者」(腎臟の陰中の火及び肝熱の腎由りして致る者を瀉ぐ)

『本草思辨錄』卷一

【白蓮】「鎮心」

『本草綱目』卷三十三果部

【白芙蓉】「膿聚毒出」「初起者即覺清涼」「清肺涼血」「散熱解毒」「其名爲清涼膏、清露散……」(其の名清涼膏、清露散……と爲す)「治一切大小癰疽腫毒惡瘡」(一切の大小の癰疽、腫毒、惡瘡を治む)「消腫排膿止痛」(腫れを消し膿を排し痛みを止む)

『本草綱目』卷三十六木部

【白梅】「治……煩渴」「消渴煩悶」「能收肺氣、治燥嗽、肺欲收」

『本草綱目』卷二十九果部

「能解先天胎毒」「利肺氣」「安神定魂」「解先天痘毒、凡中一切毒」「助清陽之氣上升」「止渴生津、解暑滌煩」(渴きを止め津を生じ、暑を解き煩を滌す)「去痰壅滯上熱」(痰を去り上熱を壅滯す)

『本草綱目拾遺』卷七花部

【雨水】「能除百病」「除痼疾」

『本草綱目拾遺』卷一水部

薛宝釵と【冷香丸】(垣見)

「清陽不升之藥」(清陽升らざるの藥)

(『本草撮要』<sup>7)</sup> 卷十水火土部(立春雨水二節内水)

【白露】「潤肺」「止消渴」「治勞瘵」

(『本草綱目』卷五水部)

「露能解暑」「宜煎潤肺之藥」

(『本草撮要』卷十水火土部)

【白霜】「食之解酒熱」

(『本草綱目』卷五水部)

【白雪】「解一切毒」「治……酒後暴熱」「解熱止渴」

(『本草綱目』卷五水部)

【蜂蜜】「止痛解毒」「除心煩」「清熱也」「解毒也、潤燥也」「生則性涼、故能清熱」(生ずれば則ち性涼なり、

(『本草綱目』卷三十九蟲部)

故に能く熱を清む)

「平邪熱」

(『本草思辨錄』卷四)

「性涼清熱」「潤肺」「惟降火藥用之」(惟だ降火の藥のみ之を用ふ)

(『本草求真』<sup>8)</sup> 卷一)

【白砂糖】「心腹熱脹、口乾渴」「治暴熱」「解熱」「冷利」「解酒毒」「潤心肺大小腸熱」(心肺の大小の腸熱を潤

す)

「已爲除熱潤燥之味、其治則能利腸解煩」(已に熱を除き燥を潤すの味と爲す、其の治は則ち能く腸を利し、

煩を解く)

(『本草求真』卷五)

「潤肺……、消痰治嗽」

(『本草撮要』卷三果部)

【梨】「潤肺涼心」「消痰降火」「解瘡毒酒毒」「熱嗽止渴」「切片貼湯火傷」(切片もて湯火の傷に貼る)

「治傷寒熱發、解丹石熱氣驚邪」(傷寒の熱發するを治め、丹石、熱氣、驚邪を解く)「止心煩氣喘熱狂」(心

煩し氣喘し熱狂するを止む)「胸中痞寒熱結者、宜多食之」(胸中痞へ寒熱結する者、宜しく多く之を食らふ

べし)

(『本草綱目』卷三三果部)

「功專清熱嗽止渴」(功専ら熱嗽を清め渴きを止む)

(『本草撮要』卷三果部)

「一切屬於熱成者、惟食梨數枚、即能轉重爲輕、消弭於無事」(一切の熱成に屬する者は、惟だ梨數枚を食ら

へば、即ち能く重を轉じて輕と爲し、無事に消弭す)

(『本草求真』卷四)

【黃柏】「熱瘡跑起」「止消渴」「安心除勞」「治……口乾心熱」「除熱」「瀉伏火」「治口舌生瘡」「瀉

火」

膀胱相火」(膀胱の相火を瀉ぐ)「療驚氣在皮間、肌膚熱赤起、目熱赤痛、口瘡」(驚氣の皮間に在りて、肌膚熱し赤起し、目熱して赤痛し、口瘡あるを療す)  
〔本草綱目〕卷三十五木部

以上の例示から明らかになるように、その構成材料の一つ一つが「清熱」「伏火」「解毒」「潤肺」といった共通の作用を持つことから、それらを調合した【冷香丸】は、解毒し、精を抑え、肺を潤す効能を持つ薬であろうことが推察出来る。

ところで、薛宝釵の病は第七回で薛宝釵自身が述べているように、「母の胎内からもらってきた一種の熱毒」が原因であり、症状は「別段これといって変わった気分になるわけでもなく、せいぜい咳が普段より出るくらい」である。この「胎毒」は『醫宗金鑑』痘疹心法要訣卷五十六「痘原」に次の様に記される。

中古之人有出痘者、情欲漸熾也。古人謂痘稟胎毒、此定論也。惟稟於胎元、故一出不再出也、毒有淺深、故出有輕重也。(中古の人の痘を出す有る者は、情欲漸く熾んなれば也。古人謂ふ、痘は胎毒を稟くと、此れ定論也。惟ふに胎元に稟く、故に一たび出ずれば再びは出でざる也、毒に淺深有り、故に出づるに輕重有る也。)

そして「熱毒」という言葉や、普段から暑がりという薛宝釵の症状から、同じく『醫宗金鑑』痘疹心法要訣卷五十六の「發熱逆證」を見ると、「喘滿喘急、毒伏於肺也、……。」(喘滿ち喘急なるは、毒肺に伏する也、……。)と記されている。更に、咳が出るという症状から、『醫宗金鑑』幼科雜病心法要訣卷五十三の「咳嗽門」を見ると、「咳嗽謂有聲有痰、因肺氣受傷……。」(咳嗽は、聲有り痰有り、肺氣傷を受くるに因りて……を謂ふ。)と記されている。これらの記述を総合すれば、薛宝釵は「母の胎内からもらってきた一種の熱毒」により咳を出し、そのため肺を悪くしていると考えられる。従って、この「清熱」「伏火」「解毒」「潤肺」といった作用のある【冷香丸】という薬は、薛宝釵の病状に頗る適切な妙薬だとみなすことが出来るであろう。

## 二、林黛玉の体質とその服用薬

さて、『紅樓夢』に於いて、もう一方の女主人公である林黛玉も普段から薬を愛用している。実は『紅樓夢』に

薛宝釵と【冷香丸】(垣見)

於いて、常日頃から個人特有の薬を服用しているのがこの二人だけであることから、やはり林黛玉とその薬の服用の背景にも何らかの作者の意図があることが推測される。そこで、この章では、林黛玉の常用薬とその病状との関係について考察してみることとする。

林黛玉の服用薬は、屋敷に来た当初は【人參養榮丸】という薬であったが、効き目がないので、【天王補心丹】という薬に変わる。ところが、それでも効き目がないということと更に【燕窩】へと変化する。この三種の薬は全て医学書に記されている実在の薬であり、今これらの処方を見ると、以下の如くなる。

【人參養榮丸】は【人參養榮湯】の錠剤だと思われる。これは『太平惠民和劑局方』に次の様に記される。

【人參養榮湯】 治積勞虛損、四肢沈滯、骨肉酸疼、呼吸少氣、行動喘噎、……心虛驚悸、陽陰衰弱、悲憂慘戚、多臥少起、……漸至瘦削、五臟氣竭、……。白芍藥、當歸、桂心、甘草、陳橘皮、人參、白朮、黃耆、熟地黄、五味子、茯苓、遠志。（積勞虛損、四肢沈滯、骨肉酸疼、呼吸に氣少なく、行動喘噎、……心虚驚悸、陽陰衰弱、悲憂慘戚、臥多く起ること少なし、……漸く瘦削に至り、五臟の氣竭くるを治む、……。）

【天王補心丹】は『景嶽全書』に次の様に記される。

【天王補心丹】 寧心保神、固精益血、壯力強志、……除驚悸、……育養心氣、……生地黃、人參、玄參、丹參、遠志、桔梗、白茯苓、五味、當歸、麥冬、天冬、柏子仁、酸棗仁。（心を寧んじ神を保ち、精を固め血を益し、力を壯んにし志を強くし、……驚悸を除き、……心氣を育養す。）

続いて、以上の構成材料の一つ一つの効能を検証し、これらの薬を更に具体的にしてみたい。紙幅の都合から、ここではその抜粋した主な効能のみを以下に列記することにする。

【人參養榮丸】 「益氣」「補五臟」「補一切勞」「補氣」「強志」「補心」「益精」

【天王補心丹】 「益氣」「定志」「補心氣不足」「強陰益精」「滋陰」「養血」「益志意」「益陰氣」

同じく、以下に【燕窩】の主な効能を抜粋する。

【燕窩】 「怯症人久服之、亦能潤肺止咳」（怯症の人久しく之を服せば、亦能く肺を潤し嗽を止む）

「大養肺陰」（大いに肺の陰を養ふ）「補而能清、爲調理虛損勞瘵之聖藥」（補ひて能く清め、虚損勞瘵を調理

するの聖藥と爲す)「腎氣上滋於肺」(腎氣上りて肺を滋す)「取其平補肺胃」(其の平を取りて肺胃を補ふ)

(『本草綱目拾遺』卷九禽部)

「可入肺生氣」(肺に入り氣を生ずべし)

(『本草求真』卷一)

「功專養肺陰」(功は専ら肺の陰を養ふ)「一切病之由於肺虛、不能清肅下行者、此皆可治」(一切の病の肺虚由りし、清肅下行する能はざる者は、此皆治むべし)

(『本草撮要』卷八禽獸部)

以上にあげた効能から、【人參養榮丸】、【天王補心丹】はかなり強い「益氣」「補心」の薬であり、【燕窩】は主に肺の陰を養う効能があることが判明する。ここで参考までに【燕窩】の医学的見地を述べておくと、肺の陰を養う作用があるので、五行相克論により、肝臓を鎮め、柔らかくする作用が生ずるのだが、肝臓をのびやかにする効能はない。従って、【燕窩】は肝臓にもかなり効用があるものだが、長期に涉って服用しなければならぬ。

次に、林黛玉の病状について検討すると、作品中に次の様な描写がある。

近頃ではいつも精神がぼんやりして、病氣も段々進行しており、医者が言うには「氣の働きが弱く血が欠けており、肺病になる恐れがある。」とのこと。

(第三十二回)

全身が熱っぽく、顔が火照るので、鏡台の所まで走り、鏡のおおいをめくりますと、頬が真っ赤になり、それは桃の花を圧倒するほどで我ながらほれほれしますが、まさかこれが病氣の兆候だとは思いませんでした。

(第三十四回)

これらの描写から、恐らく林黛玉の病は「肺癆」、即ち、所謂肺結核であると思われる。表面的に見ると、この病の源は肺であるが、実は結核菌は肺から始まり、脾臓、腎臓を經由し、ついには心臓、肝臓へと至る。つまり、肺を治す為には、まず、脾臓を治さなくてはならず、更に脾臓を治す為には肝臓を治さなくてはならないのである。してみれば、前述した薬の効能を照らし合わせると、【人參養榮丸】、【天王補心丹】は林黛玉にはただ強すぎるだけであって、これらの薬よりは、肝臓に多分の作用のある【燕窩】が効果的だということになる。事実、作品中に於いても、第四十五回では薛宝釵が林黛玉に「あなたのお薬は氣血を益し、精神を補うものには違いなけれど、熱性がすぎるので燕窩を食べるようにした方がよい」と忠告し、第五十七回では賈宝玉が「燕窩は毎日食べ続ける

薛宝釵と【冷香丸】(垣見)



ものだから、まず、二、三年も食べ続けたら、好くなるだろう」と忠告している。即ち、これらの描写は先に述べた【燕窩】の医学的見地を作者が暗に示唆するものであり、ここからも林黛玉には最初から【燕窩】を食べさせていた方が余程効果的だったということが明らかである。

### 三、薬の描写から見た薛宝釵・林黛玉の人物像

以上を要するに、作者は薛宝釵には【冷香丸】という自らが案出した全く架空の薬を服用させ、林黛玉には医学書に記されている現実の薬を服用させている。だが、それぞれの薬の効能について言えば、薛宝釵には頗る適切であったが、林黛玉には適合していなかったということになる。作品中に於ける医学描写からして、作者の医学の造詣が並々のものでなかったことは容易に想像できる。従って、この二人の複雑な薬の設定は明らかに作者の明確な意図によるものと考えられる。それでは、この二人の薬の背景には作者のどのような意図が隠されているのだろうか。この疑問について考えてみると、まず、浮かび上がるのが二人の性格描写との関連である。そこで、この章では、この二人の少女の本来の性格、とりわけ薛宝釵の人物像を林黛玉との関連において考察してみたい。

八十回を通して描かれる薛宝釵という少女の人間像は、一貫して屋敷中の者がこぞって褒めちぎる「よくできた人」である。例えば、第五回に次の様な描写がある。

意外にも今俄かに薛宝釵という少女がやって来ると、年はさほどいいないけれども、品格は立派で、容貌も美しく、人は多く黛玉様も及ばないのではとうわさします。しかも、宝釵はすることがおおらかで、その場に應じて無理なく振る舞い、黛玉がお高くとまって、下の者を見下しているのには比べものになりませんので、黛玉と比べて下の者達の心をつかんでおります。若い女中の者達も、多くの者が喜んで宝釵と遊びたがります。<sup>15</sup>

ところが、薛宝釵の言動をよく見るに、彼女は時として、所謂「よくできた」薛宝釵像とは全く別人の趣を見せる。それは、次の二つの場面に最も顕著に現れていると言える。

薛未亡人は宝釵に向かって言います「お前、聞いたかい？ 珍さんのおかみさんの妹の三姐さんは、お前の義弟

の柳湘蓮さんと既に縁談が決まっていたというのに、それがどうした訳か自分で首をはねたのです。……宝釵は聞いても、気にも留めず、言います「私に言わせれば、あの方達の思う通りにさせることですわ。お母様もあの方達の為に感傷的になる必要はありませんわ。それよりもお兄様が江南より帰られてから一、二十日になり、……あの同伴した手代の者達も大変苦勞して何ヶ月もかかって戻ってきたのです。お母様とお兄様で相談の上、やはり一席設けて謝礼をなさらねばなりませんわ。皆様に道理をわきまえないと見られるでしょう。」

(第六十七回)

ここでの薛宝釵は、尤三姐の死に驚いている母親に対し、「そんな人が死んだことなどより、他に自分達の体面を守る為になければならないことがある」と、人の死を無情にもあっさり切り捨てて。そして、次の女中の金釧兒が自殺した時の場面では、屋敷中が大騒ぎしている中、薛宝釵はその死を「おかしなこと」として、「女中一人の死など金で片付ければよい」と、またもや一人の死をいとも簡単に処置してしまうのである。

(老女)「これを何とお話しすればいいのやら!金釧兒さんが井戸へ身を投げて死んだのですよ。」……宝釵はそこで言います「それはまたおかしなことですこと。」……宝釵はこの話を聞いて、すぐに王夫人の所へと慰めに行きます。……叔母様はお慈悲深い方でございますから、……恐らく彼女は暇を出されて、事によったら井戸の前でござくて、誤って脚を滑らしたのかも知れません。彼女は上から拘束されてしまったから、外へ出たら、自ずといろいろな所へ脚を運んだのでしょう。……惜しむことではございせんわ。」……叔母様はお氣にかける必要はございせん。心が落ち着かないということではございせんわ。……叔母様は銀子を取らせて彼女を葬れば、それで主従の情を尽したことになります。」

(第三十二回)

こうした、人の死を金で簡単に片付けようとする彼女の姿を見ると、どうしても彼女の兄である薛蟠を思い浮かべずにはいられない。薛蟠はすぐにカッとして後々のことも考えずに人を殺してしまうような、凡そ似つかわしくない兄として描かれている。悲しい哉、やはり血の繋がりは侮れないもので、薛宝釵もふとした折に、そのカッとしやすい激しい気質を見せるのである。

(宝玉)「道理で他の方達がお姉様のことを楊貴妃様に例えられるのですね、なるほどお太りだと暑がりなので

薛宝釵と【冷香丸】(垣見)

すね。」宝釵はこう聞いて、思わずカッととなり、どのようにしてくれようかと思ひます、二人が正にそのような話をしていると、ちょうど侍女見習いの靛児が扇子を失くしたことから、宝釵に笑つて言ひます「きつと宝釵様が私の扇子をお隠しなされたのでしよう。宝釵様、私にお下げ渡しになさつて下さいまし。」宝釵は靛児を指さして言ひます「お前氣を付けなさい！この私がお前相手にふざけたことがありますか、お前が私を疑うのならいいけれど。お前が日頃ふざけ散らしているお嬢様方の所へ行つて、尋ねてみるべきではないの。」こゝう言われた靛児は逃げて行きました。<sup>(12)</sup>

(第三十回)

(林黛玉)「宝釵お姉様、あなたが聞いた二幕はどんな演劇ですの？」宝釵は林黛玉の顔に浮かぶ得意げな様を見て、きつと先程宝玉が嘲笑するのを聞いて、思ひを遂げたのだらうと思つてみると、又このような話を聞かれたので、笑つて言ひます「私が見たのは李逵が宋江を罵り、後で又謝る段でしたかしら。」すると、宝玉が笑ひながら言ひます「お姉様は古今の事柄に精通しておいでで、何から何まで皆御存知なのに、どうしてこの一齣の名前すら御存知ないとは、そのようにクドクドとお言いになつて。」宝釵は笑つて言ひます「：あなた達は古今の事柄に精通していらつしやるからこそ、「負荆請罪」と御存知なのですわ、。」と一区切り話が終わらない内に、宝玉と黛玉の二人には心を含む所があつたので、この話を聞くと、早くも顔を恥ずかしさで赤らめるのでした。：宝釵は更に話をして追ひ詰めようと思ひましたが、宝玉が心から恥じ入り、容貌も改まつているので、これ以上言うのも何だと、ただ一笑に済ませました。<sup>(13)</sup>

(第三十回)

だが、彼女の激しい怒りは常に抑制され、それがまともに露呈されることは滅多にない。まさしく、薛宝釵のカツとしやすい本来の氣質は、ひたすら自分を抑えることによつて、うまく隠されているのである。

さて、こうした薛宝釵とは全くの対立形象として描かれているのが林黛玉である。先にあげた第五回や、第三十回、第三十二回等の場面からしても、その評判もまるで正反対なら、その言動も全く対照的であるのが分かる。林黛玉は常に神経を張り詰めさせており、その言動には決るような鋭ささえ見られるのである。だが、裏表のある薛宝釵と同様、それが林黛玉の本来の氣質であるのかと言へば決してそうではない。というのは、その表面上の強い振る舞いは、実は弱虫で、寂しがり屋の裏返し表現だと思われるからである。事実、林黛玉はその私生活におい

て、とかく素直すぎる為か、その一風変わった考え方の為か、内心はびくびくし、一人になると、しくしくと涙を流していることが多い。今、その例として次の場面をあげると、

鸚哥が笑つて言います、「林の姫様はちようどこで心を傷めておいででしたの、ご自分で涙を流し、「今日来たばかりだというのに、あなたの所の若様のご病気を引き起こしてしまつたわ。もし玉が地面に落ちていたりでもしたら、それこそ私の過ちではないの」。と心を傷めておいででした。」(第三回)

(林黛玉)「人が集まれば散ずるわ。集まる時は嬉しいけれど、散ずる時になったら、寂しいものではないかしら、寂しくなれば感傷的になつてしまふわ、だからかえつて集まらない方がいいのよ。例えば花は咲いた時は人を敬慕させるけれど、しぼんだ時にはよけいがっかりさせるわ、だからかえつて咲かない方がいいのよ。」この様な考えなので、人が喜んでいる時、彼女はかえつて悲しんでいるのでした。(第三十一回)

だが、林黛玉はこういった態度とは裏腹に、表面では常に強気な態度を取り、自分の「弱さ、もろさ」を徐々に周囲からも嫌悪されるほど張り詰めたものへとさせてゆくのである。

それでは、一体何故、この二人の少女の言動はこうまで裏返され、そして分け隔てられてしまつたのか。それはやはり、薛宝釵の徹底的なまでの現実への執着ではなからうか。なぜなら、薛宝釵の行動には、常に計算づくの動きが見られるからである。その最も顕著な現れが、最高権力者である後室に対する薛宝釵の態度と言えよう。例えば、自分の誕生日に何が好きかと問われれば、彼女は即座に後室の好む物を列挙し、

後室はそこで宝釵に何の芝居が好きか、食べ物は何が好きか等と問いかけます。宝釵は後室がお年寄りなことから、賑やかな芝居が好きで、甘くて水分が多く柔らかい食べ物が好きだと知っていたので、そこで後室に合せて後室がかねてより好んでいる物を言っていました。後室は益々喜びます。(第二十二回)

姉妹達皆で謎解きの遊びをしている時でさえも、薛宝釵は後室の意向に沿っているかどうかを念頭に置いている。(宝釵)「これは良いけれども、ご後室様の意志とは合わないわ。」(第五十回)

こうした、できるだけ有利な立場で生き残ろうとする薛宝釵の人物像は、作品中、しばしば彼女が例えられている楊貴妃像と相通するものがある。後宮生活に於ける厳しい現実競争の中、毒気のあるカッとしやすい感情のまま、

たくましく生き抜いていく楊貴妃の像と、『紅樓夢』の大觀園の世界で、たくましく生きる薛宝釵像とは重なり合  
うのである。

以上に述べてきた薛宝釵、林黛玉の本来の人物像と前述したこの二人の薬の作用を併せて考えると、作者は、本  
来はカッとしやすく、毒がある性格であるのに、それをひたすら内面に隠している薛宝釵に対しては、わざわざ  
【冷香丸】という「清熱」「伏火」「解毒」といった作用のある薬を自ら作り出し、服用させている。そして、それ  
とは反対に、作者は、本来は気が弱くて、素直な性格であるのに、表面上は気が強くて、精神を張り詰めている林  
黛玉に対しては、氣血を益しすぎる作用がある現実の薬を故意に違えて服用させている。つまり、薛宝釵の常に抑  
えている性格と、【冷香丸】の精を抑える作用、林黛玉の張り詰めた性格と【人参養榮丸】、【天王補心丹】等の精  
を益す作用とは恰も一致しており、この二人に関して言えば、薬という観点からその人物像を見るに、その人間本  
来の像、即ち作者が言わんとする「原像」が自ずと浮かび上がってくるのである。

#### 四、まとめ

この章では、まとめとして、【冷香丸】が薛宝釵と林黛玉の関係の設定に対して、どのように関わっているのか  
考えてみたい。果たして作者は、彼女達の人物像の設定をなすに当たり、【冷香丸】にどのような役割を担わせた  
のであろうか。

まず、いま一度、前出の【冷香丸】の構成材料を見ると、上述の通り、雪や霜を始めとして、使用されている花  
の色も全て白色であることに気付く。一体、この《白》という色は何を意味しているのであろうか。言い換えれば、  
作者は何故ここまで薛宝釵の専用薬に白色を結び付けることにこだわったのであろうか。この疑問について考え  
てみると、これには中国医学の基礎概念である陰陽五行説が深く関わっていると思われる。というのは、薛宝釵の  
病の源である肺は五臟生成篇によると、五臟と五色との対応では《白》に対応するからである。<sup>(26)</sup>

それでは、更に、この《白》と肺の関係は小説全体の構成とはどのような関わりがあるのであろうか。賈宝玉と

薛宝釵、林黛玉の仲がそれぞれ金玉の縁、木石の縁と例えられるのは、薛宝釵が金鎖を所持し、林黛玉が草木の属である絳珠仙子を前身とするからであるが、そこはやはり伏線に富む『紅樓夢』の世界、理由は単にそれだけでは片付かない。というのは、五臓と五色の対応により、薛宝釵の病の源である肺に対応する五行が《金》であり、林黛玉の真の病の源である肝臓に対応する五行が《木》であるからである。つまり、陰陽と五行に基づく相剋の法則によって「金は木を制す」のであるから、林黛玉がいくら賈宝玉との縁を願っても、薛宝釵に勝てないのは当たり前のことであって、賈宝玉と薛宝釵が結ばれるのは始めから決まっていたのである。そして、この様に考えて来ると、『紅樓夢』の人物設定のからくりをも察知していたと覚しき一族の脂硯齋が次の様に評していることが甚だ重要となってくる。

前玉生香回中、顰云他有金你有玉、他有冷香你豈不該有煖香、是寶玉無藥可配矣。今顰兒之劑若許材料皆係滋補熱性之藥、兼有許多奇物、而尚未擬名、何不竟以暖香名之、以代補寶玉之不足、豈不三人一體矣。（前の玉の香りを生ずるの回の中、顰（引者注：黛玉）云ふ、「他（引者注：宝釵）に金有りて你（引者注：宝玉）に玉有り、他に【冷香】有れば你豈に該に【煖香】有らざらんや」と。是れ寶玉の藥の配す可き無きなり。今顰兒の劑、若許の材料は皆滋補熱性の藥に係り、兼ねて許多の奇物有り、而して尚未だ名を擬せず、何ぞ竟に【暖香】を以て之に名づけ、以て寶玉の不足を代補せざる、豈に三人一體なるにあらざらんや。）

（第二十八回庚辰本眉批）

この評が書かれているのは、先述の林黛玉に最も適するとされる藥の構成材料がそろわないという場面であり、わざわざ、この場面にこの評があることから、【冷香丸】が金玉縁を暗示させる伏線として用いられている事が推察される。

そして最後に、この二人の関係から、【冷香丸】の存在価値について考えてみたい。

そもそも【冷香丸】は何故に調べたのであろうか。この点に関しても、脂硯齋に次の様な興味深い評がある。卿不知從那裏弄來、余則深知是從放春山採來、以灌愁海水和成、煩廣寒玉兔搗碎、在太虛幻境空靈殿上炮製配合者也。（卿那裏從り弄び來たるやを知らざるも、余は則ち深く知る、是れ放春山從り採り來たり、灌愁海の

薛宝釵と【冷香丸】（垣見）

水を以て和成し、廣寒の玉兔を煩はして搗碎し、太虚幻境の空靈殿の上に在りて炮製配合する者なるを。）

(第七回甲戌本)

この脂評に拠れば、『冷香丸』は天上界の薬となる。実は、この指摘は林黛玉の薬にも関わってくる大変重要なものと考えられる。というのは、先に述べたように「清熱」「伏火」「解毒」「潤肺」といった作用を持つ『冷香丸』は、生まれながらにして熱毒を持っている薛宝釵に適した薬であっても、林黛玉について言えば、その薬は適していない。してみれば、『冷香丸』が天上界の薬だとすると、薛宝釵も林黛玉も天上界の女性であるので、天上界の薬を服用している薛宝釵に薬が効果を發揮するのは至極妥当である。更に、林黛玉が服用している『人参養榮丸』、『天王補心丹』は医学書にも記されていることから、現実には存在する地上界の薬であることは明らかであり、地上の薬を服用している林黛玉にその薬の効能が適していないことも当然の事だと言える。つまり、薛宝釵の薬は現実には存在しない天上界の薬だが、その効能は頗る適切であり、林黛玉の薬は現実には存在する地上界の薬だが、その効能は林黛玉自身に適していないということである。

そして、この二人の女性に関し、服用している薬を媒介として考察するならば、これは、天上の世界が正しく、現実の世界が間違っている、言い換えれば、つまり、天上 $\parallel$ 真、下界 $\parallel$ 仮ということになり、この小説の基本的テーマとも言える『假作真時真亦假』(第一回)と密接に関連していることが分かる。即ち、『紅樓夢』に於いては、真である現実世界が仮、つまり偽りの世界であって、夢に仮託された天上世界が実は真、つまり本当の世界なのである。してみれば、現実の薬である林黛玉の薬が仮の存在であり、架空の薬である『冷香丸』が真の存在となる。まさしく『冷香丸』こそが『紅樓夢』に於ける真実を物語っているのではあるまいか。

『紅樓夢』には夢と現実の正反対の二つの世界が表裏一体のものとして設定されている。そのためにその作品構成は、一つの事柄についても表裏が裏返され、更にそれがごく自然な形で一体化された一見奇怪な虚構の上に組み立てられている。『冷香丸』は読者とその虚構の中に伏せられた薛宝釵の原像や、そこから彼女と対極の位置に存在する林黛玉の原像までをも垣間見せ、更には、作品の背後に隠された伏線を明かす役割をも担っている。この様な観点から見れば、『冷香丸』は、『紅樓夢』に於いて、薛宝釵の人物設定を中心として、表面の裏側に隠さ

れている、存在があつて無きが如き作品のからくりを解き明かす不可欠な關鍵の一つであると言えるように私には思えるのである。

## 注

(1) テキストには俞平伯校訂の『紅樓夢八十回校本』全四冊（人民文学出版社 一九九三年）を使用し、本文の引用は全てこれに拠つた。

本文の訳は伊藤漱平訳『紅樓夢』を適宜、参照した。（平凡社 一九九六～九七年）

(2) 「……要春天開の白牡丹花蕊十二兩、夏天開の白荷花蕊十二兩、秋天的白芙蓉花蕊十二兩、冬天的白梅花蕊十二兩。將這四樣花蕊、於次年春分這日曬乾、和在末藥一處、一齊研好。又要雨水這日的雨水十二錢……。」……「所以了、那裏有這樣可巧的雨、便沒雨也只好再等罷了。白露這日露水十二錢、霜降這日的霜十二錢、小雪這日的雪十二錢。把這等水調勻、和了藥、再加十二錢蜂蜜、十二錢白糖、丸成龍眼大的丸子、盛在舊磁罈內、埋在花根底下。若發了病時、拿出來吃一丸、用十二分黃柏煎湯送下。」……寶釵道：「竟好。自他說了去後、一二年間、可巧都得了、好容易配成一料。……現就埋在梨花樹底下呢。」周瑞家的又道：「這藥可有名字沒有呢？」寶釵道：「有。這也是那禪頭和尚說下的、叫做「冷香丸」。」

(3) 第二十八回の次の場面である。

（寶玉）「……我替妹妹（林黛玉）配一料丸藥、包管一料不完就好了。」……「我這個方子比別的不同。那個藥名兒也古怪、一時也說不清。只講那頭胎紫河車、人形帶葉參、三百六十兩還不穀。龜大的何首烏、千年松根茯苓膽、諸如此類的藥、都不算爲奇。……。」正經按那方子、這珍珠寶石定要在古墳裏的、有那古時富貴人家妝裏的頭面拿了來纔好。如今那裏爲這個去劊墳掘墓、……。」

(4) 李時珍（商務印書館香港分館 一九三十年）

(5) 周巖（上海科学技术出版社 一九八五年）

薛宝釵と【冷香丸】（垣見）



- (6) 趙学敏(商務印書館 一九四五年)
- (7) 陳基瑞『珍本医書集成』上海科学技术出版社 一九八五年) 所収
- (8) 黄宮繡(上海科学技术出版社 一九五九年)
- (9) 吳謙等(中国中医藥出版社 一九四四年)
- (10) 陳師文等編 叢書集成所収
- (11) 張介賓(上海科学技术出版社 一九五九年)
- (12) 近日每覺神思恍惚、病已漸成、醫者更云「氣弱血虧、恐致勞怯之症。」
- (13) 覺得渾身火熱、面上作燒、走至鏡臺、揭起錦袱一照、只見腮上通紅、自羨壓倒桃花、卻不知病由此萌。
- (14) この点に關しては、常細樵氏も『紅樓夢学刊』(一九八二年 第三輯)「紅樓夢医案評述」の中で、「治肺必先治脾、因爲、土(脾)能生金(肺)」。而健脾又必先舒肝、纔能使木(肝)不尅土(脾)。……用、人參養榮丸 和 天王補心丹、顯然藥病沒有針鋒相合、所以上長期不見功效。」と述べておられる。
- (15) 不想如今忽來了一個薛寶釵、年紀雖大不多、然品格端方、容貌豐美、人多謂黛玉所不及、而且寶釵行爲豁達、隨分從時、不比黛玉孤高自許、目無下塵、故比黛玉大得下人之心。便是那些小丫頭們、亦多喜與寶釵去頑。
- (16) 薛姨媽便對寶釵說道：「我的兒、你聽見了沒有？你珍大嫂子的妹妹三姑娘、他不是已經許定給你哥哥的義弟柳湘蓮了麼、不知爲什麼自刎了。……」寶釵聽了、並不在意、便說道：「……依我說、也只好由他罷了。媽媽也不必爲他們傷感了。倒是自從哥哥打江南回來了一二十日、……那同伴去的夥計們辛辛苦苦的來回幾個月了、媽媽和哥哥商議商議、也該請一請、酬謝酬謝纔是。別叫人家看着無理似的。」
- (17) (老婆子)「這是那裏說起！金釧兒姑娘好好的投井死了。……」寶釵道：「這也奇了。……」寶釵聽見這話、忙向王夫人處來道安慰。……「姨娘是慈善人、……多半他下去住着、或是在井跟前愁頑、失了脚掉下去的。他在上頭拘束慣了、這一出去、自然要到各處去頑頑逛逛。……也不爲可惜。……」姨娘也不勞念念於茲。十分過不去、不過多賞他幾兩銀子發送他、也就盡主僕情了。」
- (18) (寶玉)「怪不得他們拿姐姐比楊妃、原也體豐怯熱。」寶釵聽說、不由的大怒、待要怎樣、……二人正說着、可巧小丫頭

靛兒因不見了扇子、和寶釵笑道：「必是寶姑娘藏了我的。好姑娘、賞我罷。」寶釵指他道：「你要仔細！我和你頑過、你再疑我。和你素日嘻皮笑臉的那些姑娘們跟前、你該問他們去。」說的個靛兒跑了。

(19) (林黛玉)「寶姐姐、你聽了兩齣什麼戲？」寶釵因見林黛玉面上有得意之態、一定是聽了寶玉方纔奚落之言、遂了他的心願、忽又見問他這話、便笑道：「我看的是李逵罵了宋江、後來又賠不是。」寶玉便笑道：「姐姐通今博古、色色都知道、怎麼連這一齣戲的名字也不知道、就說了這麼一串子……」寶釵笑道：「……你們通今博古、纔知道『負荆請罪』、……。」一句話還未說完、寶玉林黛玉二人心裏有病、聽了這話、早把臉羞紅了……寶釵再要說話、見寶玉十分慚愧、形景改變、也就不好再說、只得一笑收住。

(20) 鵬哥笑道：「林姑娘正在這裏傷心、自己淌眼抹淚的、說『今兒纔來了、就惹出你家哥兒的狂病來。倘或摔壞了那玉、豈不是因我之過』。因此便傷心……」

(21) (林黛玉)「一人有聚就有散。聚時歡喜、到散時豈不清冷、既清冷則生傷感、所以不如倒是不聚的好。此如那花開時令人愛慕、謝時則增惆悵、所以倒是不開的好。」故此、人以爲喜之時、他反以爲惹。

(22) 賈母因問寶釵愛聽何戲、愛吃何物等語。寶釵深知賈母年老人、喜熱鬧戲文、愛甜爛之食、便總依賈母向日所喜者說了出來。賈母更加歡悅。

(23) (寶釵)「這些雖好、不合老太太的意思……。」

(24) 例えば、第二十七回の回目には「滴翠亭楊妃戲彩蝶」とあり、この楊妃は薛宝釵をさしている。薛宝釵と楊貴妃との関連に関しては、体質的な関連も含めて、稿を改めて詳しく述べたいが、『洪昇年譜』に「春末、應江南提督張雲翼之聘、往遊松江。雲翼延爲上客、開長筵、盛集賓客、爲演《長生殿》。曹寅聞之、亦迎致訪思於江寧、集南北名流爲勝會、獨讓訪思居上座、以演《長生殿》劇。每優人演出一折、訪思與寅即饜對其本以合節奏、凡三晝夜始畢、一時傳爲盛事。」(章培恒 上海古籍出版社 一九七九年)とあり、『長生殿』の作者である洪昇が曹雪芹の祖父である曹寅に招かれ、『長生殿』を上演したという記述があることから、作者が楊貴妃故事を熟知していたことが推測される。

(25) この点に関しては、汪佩琴氏も『《紅樓》医話』(学林出版社 一九八七年)の中で「根據五行五色婦經理論、肺屬白色、所以這些花一律都用白色、可以真達肺經」と指摘しておられる。

薛宝釵と【冷香丸】(垣見)